

トマス・アクィナス著
「信仰箇条と教会の諸秘蹟について
——パレルモの大司教宛」(承前)

増 田 三 彦

〔2〕教会の諸秘蹟について

612. 今は、教会の諸秘蹟について考察することが残っている。ところで、その総ては恩寵の結果に関わる第四の箇条の下に包含される【「信仰箇条について」n.602】。しかし、あなたは諸秘蹟について特別にお問いになったのゆえ、それぞれの秘蹟について論じなくてはならない。

ところで、第一に知るべきことは、アウグスティヌスが『神国論』第10巻において述べているように、秘蹟 *sacramentum* とは、「聖なる秘密 *sacrum secretum*」、乃至は「聖なるものの徴 *sacrae rei signum*」だということである。ところで、旧法において幾つかの秘蹟が、即ち聖なるものの徴が、あった。例えば、過越の小羊その他の律法の諸秘蹟がこれである。これらは、キリストの恩寵を単に表示していただけで、原因するものではなかった。だから使徒は、『ガラテヤ書』4：9においてこれらを、「内容がなく無力な初歩 *elementa*」と呼んでいるのである。「内容がない」というのは、恩寵を包含していなかったからである。「無力な」というのは、恩寵を受けることができなかったからである。これに対して、新法の諸秘蹟は恩寵を包含しており、授けるのである。実際、新約の諸秘蹟においては、アウグスティヌス【イシドルス『語源論』6, c.19, n.40】が言う如く、「キリストの力が、可視的なものの覆いの下に、より隠れた仕方で救いを来す」のである。だから、新法の秘蹟は、「不可視的な恩寵の可視的な形であり、似像を担い、原因としてある」【ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第4巻第1区分第4章、2】。例えば、洗礼の水において行われる洗淨は、洗礼の力による罪からの内的浄化を表現している。

613. こうした新法の秘蹟は七つ、つまり、洗礼、堅信、聖体、悔悛、終油、叙階、婚姻である。これらのうち、始めの五つは、一人の人間の自分自身にお

ける完成へと秩序づけられている。これに対し、残る二つは、全教会の完成と多数化へと秩序づけられている。まことに、靈的な生は身体的な生に相似ている。然るに、身体的な生において、人間は、第一に、この世に生れる出生によって、第二に、完全な量と力にまで至る成長によって、第三に、人間の生命と力を維持する食物によって、完成せしめられる。もしも人間が決して病気にならないとすれば、これらのものだけで十分であろう。だが、人間はしばしば病気になるのゆえ、第四に、癒しが必要である。靈的な生においても同様である。

第一に、人は再生を必要とし、これが洗礼によってもたらされる。『ヨハネ福音書』3：5に言う。「ひとは水と聖霊によって再び生れるのでなければ神の国に入ることができない」。

第二に、人はいわば何らかの靈的成長を通じて完全な力を受けなければならない。これは堅信の秘蹟による。これは使徒たちにおいて起ったことに似ている。つまり、聖霊が使徒たちのうちに来て使徒たちを強めたのである。だから主は、『ルカ福音書』24：49において彼らに、「高い所からの力を着せられるまで、ここにとどまっていなさい」と言われたのである。

第三に、人は聖体の秘蹟を通じて靈的に養われなくてはならない。『ヨハネ福音書』6：54に言う。「あなたたちは、人の子の肉を食べその血を飲まなければ、あなたたちのうちに生命を持つことができない」。

第四に、人は悔悛の秘蹟によって靈的な仕方癒されなくてはならない。『詩編』40：5に言う。「私の魂を癒してください。あなたに対して罪を犯したからです」。

また、終油の秘蹟によって、靈的にも身体的にも癒されなくてはならない。『ヤコブ書』5：14に言う。「あなたたちの誰かが病気であるなら、教会の長老を招き、主の名によって油を塗り祈ってもらいなさい。信仰の祈りは病人を救い、主が彼を起き上がらせてくださるであろう。もしも彼が諸々の罪のうちにあるならば、赦していただけるであろう」。

また、教会の共通の益に関しては、二つの秘蹟が、即ち叙階と婚姻が、定められている。すなわち、叙階を通じて、教会が統治され、靈的に多数化されるのであり、婚姻を通じて、身体的に多数化されるのである。

614. ところで、既述の七つの秘蹟が共通な点と固有な点を持つということ考察しなくてはならない。総ての秘蹟に共通なのは、既述の如く、恩寵を授けるということである。また、総ての秘蹟に共通なのは、どの秘蹟も言葉と物

体的な物事 **res** に存するということである。それはちょうど、諸秘蹟の働き手なるキリストが肉となった御言葉であるのと同様である。そして、ちょうどキリストの肉が、それに合一せしめられている御言葉を通じて聖化され、また聖化する力を有するように、諸秘蹟の（物的な）物事も、それに注ぎかけられる言葉を通じて、聖化され、また聖化する力を有する。それでアウグスティヌスは、『ヨハネ福音書講解』（80, 3）において、「元素に言葉が加わり、秘蹟となる」と言うのである。ところで、それによって諸秘蹟が聖化されるころの言葉は、「秘蹟の形相」と呼ばれる。これに対し、こうした言葉によって聖化される秘蹟の物事は「秘蹟の質料」と呼ばれる。例えば、水が洗礼の質料であり、聖香油が堅信の質料である。また、どの秘蹟においても、教会が行うことを行うという意図と共に秘蹟を授ける役務者たる人物 **persona** が必要とされる。これら三つのもののうちのどれかが欠けているならば、すなわち、もしも言葉の然るべき形相がないならば、もしも然るべき質料がないならば、もしも秘蹟の役務者が秘蹟を授ける意図を持たないならば、秘蹟は完成されない。また、秘蹟の結果・効果は、受容者の罪科によって妨げられる。例えば、虚構者が、準備された心を持たずに、秘蹟を受けようと近づくような場合がこれである。実際、このような者は、秘蹟を受けるとしても、秘蹟の結果を、即ち聖霊の恩寵を、受けないのである。何故なら、『智書』1：5に言われる如く、「教えを与える聖なる霊は、虚構から逃げ去る」からである。逆にしかし、或る人々は、まだ秘蹟を受けていなくても、秘蹟への帰依のために秘蹟の結果を受ける。彼らは希求乃至は願望のうちに秘蹟を有するのである。

615. さて、一部の秘蹟に固有な点も幾つかある。というのも、これらの秘蹟の一部は霊印 **character** を刻印する。それは、（霊印を受けた者を）他の者たちから区別せしめる或る霊的な徴である。洗礼の秘蹟において、叙階の秘蹟において、堅信の秘蹟において、霊印が刻印される。そして、これらの秘蹟が同じ人物に対して繰り返されることは決してない。実際、洗礼を受けた者がさらに洗礼を、堅信を受けた者が再び堅信を、叙階を受けた者が再び叙階を受けるべきでは決してない。何故なら、これらの秘蹟において刻印される霊印は消し去られることができないからである。これに対して、他の諸秘蹟においては、秘蹟を受ける者に霊印が刻印されることはなく、だから、秘蹟を受ける人物に関して繰り返されることができる。しかしながら、質料に関してはそうでない。すなわち、一人の人間が度々聖体を受けることができ、度々悔悛することがで

き、度々終油を受けることができ、度々婚姻を結ぶことができる。しかしながら、同じホステアが度々聖別されるべきではないし、病者のための同じ油が度々祝福されるべきではない。【霊印については、『神学大全』第3部第63問題を参照】

さらに他の相異もある。一部の秘蹟は救いに必要なものである。諸々の罪を清めるために制定されている洗礼と悔悛がそうであって、これらの秘蹟が存在しなければ人が救われることはできない。これに対して、他の諸秘蹟は救いのために必要なものではない。何故なら、これらなしにも、秘蹟を軽視するのではないかぎり、救いがあり得るからである。

616. 教会の諸秘蹟をめぐって一般的に以上のことが考察されたので、個々の秘蹟について特殊な仕方でも若干のことを述べなくてはならない。

さて、第一に、洗礼に関して知るべきことは、洗礼の質料が真かつ自然の水であることであり、水が冷たいか熱いかはどうでもよい。これに対し、薔薇水やこれに類する人工的な水によって洗礼が授けられることはできない。ところで、洗礼の形相は「私は父と子と聖霊の名によってあなたに洗礼を授ける」である。また、この秘蹟の固有な役務者は司祭であって、洗礼を受けることが役務上司祭に適合する。必要が迫っている場合は、しかし、単に助祭だけではなく、信徒でも女性でも、そればかりか、異教徒でも異端者でも洗礼を受けることができる。ただし、教会が定めた形相を守り、教会が行うことを行うという意図を持っていないとはならない。もしも、しかし、緊急時以外に誰かがこうした人々から洗礼を受けるとすれば、その人は確かに秘蹟を受けるのであり再び洗礼を受けるべきではないが、それでいて秘蹟の恩寵を受けないのである。何故なら、彼らは、教会の法規に反する仕方でも秘蹟を受ける者として、虚構者と見做されるからである。さて、洗礼の結果は、原罪と自罪の、そしてあらゆる罪科と罰の、赦しであり、それで、洗礼を受けた人々に過去の罪のための何らかの償いが課されることはない。却って、洗礼の後すぐ死ぬ人々は神の栄光へと導かれるのである。ここから、洗礼の結果は樂園の門の開放であるとされるのである。

617. この秘蹟をめぐって幾つかの誤謬があった。

第一はセレウキアニ派の誤謬である。彼らは水の洗礼を認めず、ただ霊的洗礼のみを認める。彼らに反対する仕方でも、主は『ヨハネ福音書』3：5におい

て、「ひとは水と聖霊によって再び生れるのでなければ、神の国に入ることができない」と言っておられる。

第二の誤謬は、カトリック者によって洗礼を受けた者たちに再び洗礼を受けていたドナトゥス派の誤謬である。彼らに反対する仕方、『エフェソ書』4：5において、「信仰は一つ、洗礼は一つ」と言われている。

彼らには他にも誤謬がある。罪のうちにある人は洗礼を受けることができないと言うからである。彼らに反対する仕方、『ヨハネ福音書』1：33に、「霊がその上に下り、その上にとどまるのをあなたが見る方、その方が、洗礼を授ける方である」と言われている。この方はキリストである。だから、悪しき役務者は人に害を与えない。この秘蹟においても他の諸秘蹟においてもそうである。何故なら、秘蹟を内的に完成するキリストは善い方であるからである。

第四の誤謬はペラギウス派の誤謬である。彼らが言うには、幼児が「洗礼を授けられるのは、再生によって養子となり、善い者から一層善い者へと移されて、神の国に入ることを許されるからである。この更新によって、古い拘束の何らかの悪から開放されるわけではない」。

618. 第二の秘蹟は堅信の秘蹟であり、その質料は、油——これは良心の光輝を表示する——とバルサム——これは善き評判の香りを表示する——から司教に祝福されて作られた聖香油である。これに対して、この秘蹟の形相は、「私は父と子と聖霊の名によって、あなたに十字架の徴をし、救いの聖香油によってあなたを強める。アメン」である。また、この秘蹟の役務者はただ司教のみである。何故なら、司祭には堅信を受ける者の額に聖香油を塗ることが許されないからである。この秘蹟の結果は、聖霊が与えられて受堅者が強められることである。それはちょうど五旬祭の日に、使徒たちに聖霊が与えられたのと同様である。それはキリスト者がキリストの名を勇敢に宣言することができるためである。だから、ひとは、強められるために、そこに羞恥の座があるところの額に塗油されるのである。それは、つまり、キリストの名を、とりわけキリストの十字架を、宣言することを恥じないためである。十字架は、「ユダヤ人にとっては蹟きであり、ギリシャ人によっては愚かなもの」(『コリント前書』1：23)である。またこれがために、十字架の徴がしるされるのである。

619. この秘蹟に関して、一部のギリシャ人の誤謬がある。単なる司祭がこの秘蹟を授けることができると彼らは言う。彼らに反対する仕方、『使徒行

録』8：14-17において次のように言われている。すなわち、使徒たちは使徒の「ペトロとヨハネを遣わし」、この二人は助祭フィリッポによって洗礼を受けていた「人々の上に手を置いた」。すると「彼らは聖霊を受けた」。然るに、司教たちは教会において使徒たちの位置を占めている。そして按手に当るものとして、教会において堅信が授けられるのである。【1983年に公布された、新教会法典（『カトリック新教会法典』有斐閣）第882条以下、及び第二バチカン公会議『教会憲章』26を参照】

620. 第三の秘蹟は聖体の秘蹟である。その質料は、小麦のパンと、葡萄の実からつくられた葡萄酒である。葡萄酒には、少量の水——水が葡萄酒に変わることができるように——が混ぜられる。というのも、水は、キリストに合体される人々を表示しているのである。しかしながら、小麦以外のパンや、葡萄以外の酒によってこの秘蹟が執行されてはならない。また、この秘蹟の形相はキリストの言葉そのものであり、「これは私の体である」と「これは私の血の杯、新しい永遠の契約の血の(杯)である。この血はあなたがたと多くの人々のために流されて罪の赦しとなる」である。まことに、司祭はキリストの代理としてこれを語り、秘蹟を執行するのである。この秘蹟の役務者は司祭であり、他の誰もキリストの体を生ぜしめることができない。

さて、この秘蹟の結果は二様である。

第一は、秘蹟の聖別自体に存する。というのも、上述の言葉の力によって、パンはキリストの体に転化し、葡萄酒は血に転化するのである。ただしその際、全キリストが、基体なしにとどまるところのパンの諸形姿 *species* の下に包含されており、また全キリストが、葡萄酒の諸形姿の下に包含されている。そして、聖別されたホステアの、また聖別された葡萄酒の、どの部分にも、それらが分けられても、全キリストがおられる。

相応しい仕方での秘蹟を受ける魂において生じるこの秘蹟の第二の結果は、人間の、キリストへの一体化である。キリストが『ヨハネ福音書』6：56に言うておられるように、「私の肉を食べ私の血を飲む者は、私にとどまり、私もその者にとどまる」。そして、恩寵によって人はキリストに合体され、その諸肢体と合一せしめられるのゆえ、この秘蹟によって、これを相応しく受ける人々において恩寵が増大するということが結果する。

こうして、だから、この秘蹟において「単なる秘蹟 *sacramentum tantum*」な

るものがあり、これはパンと葡萄酒の形姿自体である。また「内実と秘蹟 *res et sacramentum*」なるものがあり、これはキリストの真の身体である。また「単なる内実 *res tantum*」なるものがあり、これは神秘体の、即ち教会の、一性である。これをこの秘蹟は表示し、原因するのである。【聖体の秘蹟における *sacramentum tantum* と *res et sacramentum* それに *res tantum* については、『神学大全』第3部第73問題主文、同第6項主文、第79問題第4項主文、第80問題第4項主文、同第8項主文を参照。聖体における「単なる秘蹟・単なるしるし」とは、信仰者であれ不信仰者であれ、誰にでも感覚的に感知できるパンとぶどう酒であり、「ものと秘蹟」とは、そこに現に存在している真のキリストの体、受難し復活したキリスト自体である。「単なるもの」とは、聖体を受ける者のうちに生じる秘蹟の効果、めぐみ、つまり信仰者とキリストとの合一、神秘体の一性である。】

621. この秘蹟に関して多くの誤謬があった。

その第一は、この秘蹟のうちにキリストの真の体はなく、単に表示する仕方でのみキリストの体があるのだと言った人々の誤謬である。ペレンガリウスがこの誤謬の創始者であったと言われる。これに反対する仕方では、『ヨハネ福音書』6：55に、「私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物である」と言われている。

第二は、アルトテュリタエ派【モンタヌス派、「アルトス」はパン、「チュロス」はチーズ】の誤謬である。彼らはこの秘蹟においてパンとチーズを捧げる。彼らが言うには、最初の人々によって、地の果実と羊の捧げ物が執行されたのである。これに反対する仕方では、この秘蹟の創始者である主は、パンと葡萄酒を弟子たちに渡されたのである。

第三は、カタフリガエ派とペプジアニ派【これらはモンタノス主義者】の誤謬であり、彼らは幼児たちの全身から小さな諸々の指し傷で以て抜き取った血液を麦粉に混ぜてパンを作り、いわば彼らの聖体を作ったと伝えられている。これはキリストの犠牲というよりも、悪霊どもの犠牲に似ている。『詩編』105：38に言う。「彼らは無辜の血を流し、それをカナンの彫像に捧げた」。

第四は、アクアライ派の誤謬である。彼らは水だけを犠牲として捧げるのである。しかし、『箴言』9：5において、智者——これはキリストである——の口から出る言葉として、「私があなたたちのために混ぜた葡萄酒を飲め」と言われている。

第五は、オフィタエ派【グノシス派の異端】の誤謬である。彼らはキリストを蛇であると思ひ込み、「慣らされた一匹の蛇に、口でパンを舐めさせ、こうしてパンを聖体として聖化した」のである。

第六は、ペプチアニ派の誤謬である。彼らは「女性たちに優位を与え、女性は彼らのものとは祭司職で以て表敬される」。

第七は、リヨンの貧者たち【ワルド派、12世紀に、リヨンの商人ヴァルデスに始まる】の誤謬である。彼らが言うには、この秘蹟を執行できるのは正しい人のみである。こうした誤謬とは反対に、主は使徒たちにこの秘蹟を行う権能を伝えのであり、だから、或る継承によって使徒たちからこの権能を受けた人々のみが、この秘蹟を執行することができる。

第八は、アダム派と呼ばれる者たちの誤謬である。彼らはアダムの裸体を模倣して、裸の男女が集まり、裸で朗読を聞き、「裸で祈り、裸で秘蹟を行う」者たちである。彼らに反対する仕方、『コリント前書』14：40に、「あなたたちのところでは、一切が立派に秩序正しく行われるべきである」と言われている。

622. 第四の秘蹟は悔悛の秘蹟である。そのいわば質料は、悔悛の行為である。それは「悔悛の三つの部分」と呼ばれる。その第一は、心の痛悔であり、これに属するのは、人が、犯した罪について嘆き、以後罪を犯すまいと決意することである。第二の部分は口の告白である。これに属するのは、罪人が、記憶している総ての罪をすっかり自分の司祭に告白すること、何人かの司祭に分けて告白しないことである。第三の部分は、司祭の決定に従い、罪のために償うことである。これは主として、断食と祈りと施しによって行われる。

この秘蹟の形相は、司祭が発する赦しの言葉である。司祭は「私はあなたを赦す」と言う。この秘蹟の役務者は、通常の、或いは長上の付託による、赦免の権能を持つ司祭である。この秘蹟の結果は罪の赦しである。

623. この秘蹟に反対するものとして、ノヴァティヤヌス派【ノヴァティヤヌスは200年頃—258年、厳格派の離教者】の誤謬がある。彼らが言うには、洗礼の後で罪を犯した人が悔悛によって赦しを得ることはできない。これに対しては、『黙示録』2：5において、「どこから墜ちたかを思い出し、悔悛して最初の業をなせ」と言われている。

624. 第五の秘蹟は終油の秘蹟である【「終油の秘蹟 *extrema unctio*」は、今は「病者の塗油 *unctio infirmorum*」と呼ばれる。第二バチカン公会議『典礼憲章』73】。その質料は司教によって祝福されたオリーブの油である。ところで、この秘蹟は、死の危険が恐れられるときの病人にしか与えられるべきでない。こうした病人は、五感の場所に塗油されるべきである。つまり、視覚のために目に、聴覚のために耳に、嗅覚のために鼻に、味覚または語りのために口に、触覚のために手に、歩行のために足に、塗油されるべきである。一部の人々は、しかし、腰において活発であるところの快樂のために、腰に塗油する。

さて、この秘蹟の形相は「この塗油と、主のいとも慈悲深い憐れみによって、主がおよそあなたが視覚によって犯した罪を赦し給うように」。そして視覚以外についても同様に言う。この秘蹟の役務者は司祭である。この秘蹟の結果は、精神と身体の癒しである。

625. この秘蹟についてはヘラクリオニタエ派の誤謬がある。彼らは「死につつある人々を新奇な仕方ではいわば贖うと言われている。つまり、油とバルサムと水によって、また彼らの頭の上でヘブライ語で語られる祈願によって、それを行うのである」と。これは、既述 (613) の如く、ヤコブから伝えられた形式に反する。

626. 第六は叙階の秘蹟である。ところで、七つの位階がある。それは、司祭職、助祭職、副助祭職、侍祭職、祓魔師職、読師職、守門職である。「聖職」*clericatus* は、これに対し、位階ではなく、自らを神的職務に与えるという一種の生き方の宣言である。司教職は、位階というより、むしろ顕職である【トマスはこう言っているが、第二バチカン公会議『教会憲章』22、新教会法典第1009条（「位階は司教職、司祭職、及び助祭職である」）参照。NEW CATHOLIC ENCYCLOPEDIA の BISHOP (SACRAMENTAL THEOLOGY OF) の項参照】。ところで、この秘蹟の質料は、その伝達によって位階が授けられるところの質料的なものである。例えば、司祭職はカリスの授与によって伝えられる。そしてどの位階も、その位階の役務に主として属するところのものの授与によって伝えられる。またこの秘蹟の形相は、「生ける者たちと死せる者たちのために教会において犠牲を捧げる権能を受けよ」といったものである。そして、他の位階についても同様なことが言われるべきである。この秘蹟の役務者は、位階を授ける司教である。この秘蹟の結果は、ひとがキリストの役務

者に適した者となるための恩寵の増大である。

この秘蹟については、司祭を司教から区別するべきでないと言ったアエリウスの誤謬があった【セバステ(アルメニア)のアエリウスは、4世紀中頃、司教職の権能と司祭職の権能が全く同等だと主張した】。

627. 第七の秘蹟は婚姻の秘蹟である。これはキリストと教会の結合の徴である。婚姻の作出因は言葉によって現在のこととして表現された相互の合意である【『神学大全』第3部補遺の第45問題参照】。ところで、婚姻に属する三様の善がある。第一は、子供を授かり神の崇拜へと教育することである。第二は、一方が他方に対して守るべき誠実である。第三は、秘蹟、即ち、キリストと教会の不可視的な結合を表示するものなるがゆえの婚姻の不可分性である。

628. この秘蹟に関する多くの誤謬がある。

第一はタティアヌス派【2世紀のエンクラト派、禁欲主義者】の誤謬であり、彼らは結婚を断罪したのである。これに反対する仕方、『コリント前書』7：28において、「女性が結婚しても罪を犯すわけではない」と言われている。

第二はヨヴィニアヌス派の誤謬である【ヨヴィニアヌスは4世紀の反禁欲主義者、390年に断罪された】。彼らは結婚を童貞性・処女性と同等なものとしたのである。これに関しては既に(『信仰箇条と教会の諸秘蹟について——パレルモの大司教宛』602)述べられた。

第三はニコライ派の誤謬であり、彼らはお互い無差別に相手の妻と交ったのである。また、恥ずべきことを教え実行する他の多くの異端者があった。彼らに反対する仕方、『ヘブライ書』13：4に、「婚姻は、万人において貴ばれるべきものであり、寝床はけがれなきものでなくてはならない」と言われている。

629. ところで、これらの秘蹟の力によって人間は来るべき栄光に導かれる。それは、七つの嫁資に存する。三つは魂のものであり、四つは身体のものである。魂の第一の嫁資は本質による神の直視である。『ヨハネ第一書翰』3：2に言う。「私たちは神をあるがままに見るであろう」。第二の嫁資は把握であり、つまり、我々はこれによって、神をいわば我々の報酬として捉えるのである。『コリント前書』9：24に言う。「あなたは把握するように走れ」。第三は、我々が神において楽しむという享受である。『ヨブ記』22：26に言う。「その時、あなたは全能者についての諸々の喜びに満ち溢れるであろう」。

身体の第一の嫁資は無受動性である。『コリント前書』15:53に言う。「この可滅的なものが不滅なものをまとうはずである」。第二の嫁資は明るさである。『マタイ福音書』13:43に言う。「義人たちは父の国で太陽のように輝くであろう」。第三の嫁資は敏捷さであり、それによって人々は欲する所に速やかに至ることができる。『智書』3:7に言う。「彼らは輝き、葦の火花のように飛び散るであろう」。第四は精妙さであり、これによって、欲するものに浸透することができる。『コリント前書』15:44に言う。「魂的身体において蒔かれ、霊的身体として復活するであろう」。世々に生き支配し給う方が我々をこうした栄光に導き給わんことを。アメン。

後書

翻訳のテキストとして使用したのは、レオ版トマス・アクィナス全集第42巻、*Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia Iussu Leonis 13 P. M. Edita Tomus 42, Roma, 1979*に収められている、*De Articulis Fidei et Ecclesiae Sacramentis ad Archiepiscopum Panormitanum* であり、マリエッチ版トマス・アクィナス神学小論集第1巻所収のテキスト、*S. Thomae Aquinatis, opuscula Theologica, Vol. 1, De re Dogmatica et Morali, cura et sstudio Fr. Raymundi A. Verardo O. P., Marietti, torino/Roma 1954, pp. 141-147*を参照した。

マリエッチ版の番号を付した。

聖書の章節はラテン語ヴルガタ訳の数字である。聖書の節の指示は16世紀に始まるものでありトマスの時代には付されていないものであるが、入れておいた。

【 】の中に、不統一ではあるが、若干の説明を置いた。出典個所などは、レオ版の脚注を見られたし。

ここに訳したのは、「島大言語文化」第11号に掲載した前半部分に続く後半部分である。七つの秘蹟について簡潔に説明されている。またここでは、セレウキアニ派、ドナトゥス派、ペラギウス派、一部のギリシャ人、ベレンガリウス、アルトテュリタエ派、カタフリガエ派、ペプジアニ派、アクアライ派、オ

フィタエ派、ペプチアニ派、リヨンの貧者たち、アダム派、ノヴァティアヌス派、ヘラクリオニタエ派、タティアヌス派、ヨヴィニアヌス派、ニコライ派の秘蹟に関する誤謬が紹介されている。

トマスのこの小著はよく読まれたものであり、またフィレンツェ公会議における教皇エウゲニウス4世による1439年11月22日の大勅書 *Exultate Deo* の中に、トマスのこの小著の「教会の秘蹟について」の部分が多く、そのままの形で、利用されていることはよく知られている。「デンツィンガー」1310-1327参照。

HEINRICH DENZINGER SYMBOLES ET DÉFINITIONS DE LA FOI CATHOLIQUE Édité par Peter Hünermann pour l'édition originale et par Joseph Hoffmann pour l'édition française Ed. du Cerf; 1996

『改訂版デンツィンガー・シェーンメッツァー カトリック教会文書資料集』
A・ジンンマーマン監修 浜寛五郎訳、エンデルレ書店